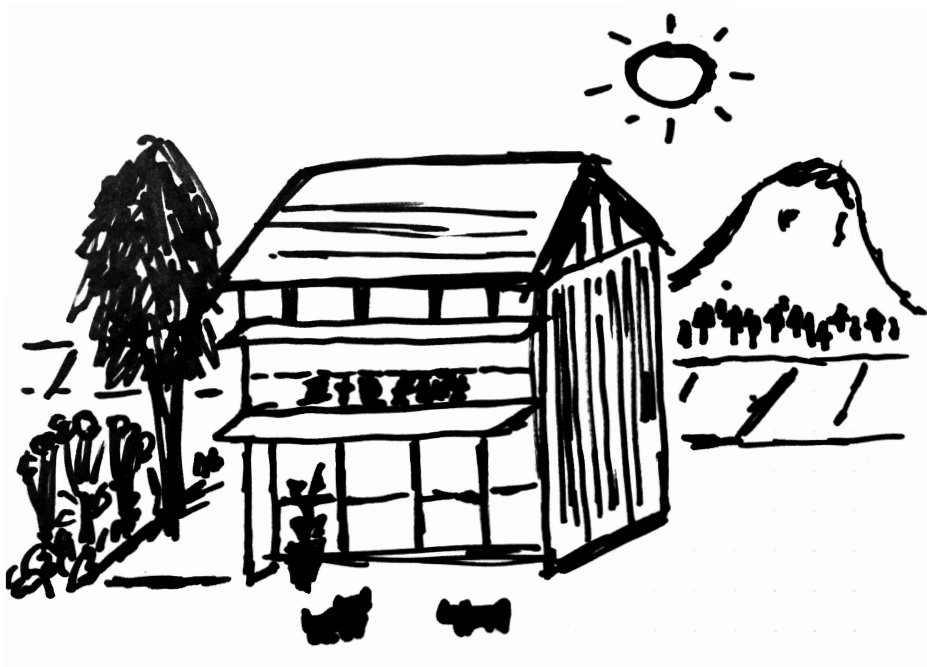


The Institute of Barbarian Books
LEAVING NISHIAIZU
2016 – 2020

バーバリアンブックス
「この場所を去ること」
2017 – 2020



The Institute of Barbarian Books
LEAVING NISHIAIZU
2016 – 2020

バーバリアンブックス
「この場所を去ること」
2017 – 2020

バーバリアンブックス

「この場所を去ること」

2017 – 2020

ここに記述する内容は特定の人物または組織への攻撃を意図したものではありません。しかし、一部の人にはそのように認識されることは避けられない事実だと認識しています。自分たちの考えをこのような形で公表する理由は、あくまで私たちが個人的に経験したことを記録し、それがどのようにバーバリアンブックス閉鎖の決断をもたらしたかを正直に記述するためだということをご理解いただきたいと思います。

また、ここ数年間、さまざまな形でバーバリアンブックスを支えてくれた多くの友人や訪問してくれた皆さん、特にこれから訪問したいと思っていたのに来る事ができなくなってしまった皆さんに正直になりたいという想いがあります。このような決断に至った事を心からお詫び申し上げます。

ここに記述している状況はそれほど異例なものではないと私たちは思っています。日本全国で消えつつある「田舎」の文化、その一つ一つに耳が傾けられるべき無数の声や物語が存在しています。よそ者である私たちが「田舎」の人々の言葉を代弁する事はできませんが、私たちの言葉が何らかの形であらゆる議論の一部として役に立つ事があれば、幸いです。

最後に、私たちの言葉が「田舎」に住むことに情熱と興味を持っている人を、いつかどこかで助けるツールの1つになることを願っています。

(English from page 13)

The writing that follows is not intended to be an attack on anyone or any organization, though we have no doubt it will be perceived as such by some. Our reasons for publishing these thoughts is simply to make a candid record of the things we've personally witnessed and experienced that led to our decision.

We would also like to be honest with the many friends and visitors who supported us in various ways throughout the past few years, especially the ones who were eager to visit and now may no longer be able to. For this we sincerely apologize.

We believe that the situation outlined here is in the end not all that special or unique. The disintegration of *inaka* culture is happening all around the country and there are countless voices and stories that deserve to be listened to. As outsiders we cannot pretend to speak for the people of *inaka* so we hope our story can simply add to the discussion in a small way.

Finally, for those of you who, like us, may have an interest or passion to live in *inaka*, we hope our perspective can be one of many tools to help you along the way.

1. 地域活性化

4年前(2016年)、アメリカを離れ日本へやってきた私たちは、より意味のある形でグラフィックデザインを実践できる方法を探していました。いろいろとインターネットで検索していると「地域おこし協力隊」というキーワードに引っかかり、私たちはそのコンセプトにすぐに興味を持ちました。「都市部から地域へ移住し3年間地域協力活動にあたり生活や仕事をしながら最終的に定住定着を図る」ということで、私たちが地域に根ざした形でデザイン業がしたいという希望にも重なる部分があり、さらに調べていく中でデザイン・アート分野の協力隊を募集していた西会津国際芸術村(以下:芸術村)という文化交流施設を見つけたことが、西会津町の存在を知るきっかけとなりました。

故郷を離れて都市周辺に定住する農村地域出身の若者が増え続け、日本全体が深刻な地方過疎化の危機に直面していることは周知の事実です。人口の高齢化と労働力の不足が相まって地域経済がもはや自立できず、町全体が消滅するリスクにさらされている状況が生まれています。このため県や地方自治体、民間企業は、この問題に対処する手段としてさまざまな活性化プログラム(地域おこし協力隊もその一部)に近年ますます重点を置いています。

私たちはこれらの活性化プログラムのコンセプトは本質的に良いものだと思っていましたし、農村コミュニティのより良い未来の構築が最終目的なのであれば、地域おこし協力隊のような部外者(よそ者)は間違いなくこのプロセスで重要な役割を果たすことができるはずだと信じていました。

地域活性化は英語で"Regional Revitalization"と訳されていますが、"Revitalization"という単語には「再び生気を与える」「死にゆくものを生き返らせる」という意味合いもあります。単純に直訳された単語だとは思いますが、実際に西会津に移住し数年間暮らして改めてこの"Revitalization"という単語について考えてみた時に、いくつか疑問が浮かびました。地域活性化において「死にゆくもの」があるとしたら、それは一体何でしょうか?活性化とは実際に何を伴うのでしょうか?誰が活性化の恩恵を受けるのでしょうか?逆に誰が危害を受けるのでしょうか?活性化の影響を受けるのは誰の未来でしょうか?

これらの疑問に対する答えはそれほど明白ではありません。すべての地域、町、小さな村には独自の文化と歴史があり、地域の住民はそれぞれ独自の欲望、恐れ、そして物語を持っています。過疎化は農村地域にとって大きな問題かもしれませんが、注目されるべき問題はそれだけではありません。場合によっては過疎化がまったく問題と見なされないケースもあります。ですから私たちが

地域活性化について考えるとき、それぞれの既存のコミュニティとその中で継続されてきた「生活」という「物語」があるということ、それが地域と切っても切り離せない存在であることを理解しなければなりません。

そういった意味でも、地域活性化が必ずしもすべての土地と人に適用できる万能な絆創膏であるとは言えませんが、現在日本における人口減少や過疎高齢化問題の解決策として各地全会一致で進められているのは地方創生・活性化への取り組みだと思えます。そして、これらのほとんどの最終目標は経済発展と地域経済の改善であり、地域でより多くのお金が循環すれば人々の生活と未来が改善されることを前提としています。確かに、地域経済の改善は短期的なプラスの効果を生み出し間違いなく当面は仕事を提供することができますが、利益が究極の目的として定義されている場合、地域活性化は単にそこに到達するための手段になってしまうのではないのでしょうか。

地域コミュニティの長期的な目標や地元住民の幸福感など、定量化できない要因について考えるとき、経済的利益はほとんど関係がないかもしれません。観光のような利益ベースの活動に焦点を当てている町もあれば、農地の維持や教育システムの改善に関心がある町など様々なケースが存在しますが、どちらにしても、必ずしもより多くのお金があれば問題が解決できるとは限りません。これらの文脈において、地域活性化の取り組みは実際に地域でどのような役割を果たすことができるのでしょうか？

より誠実で有用な地域活性化とは、地元住民と同じ目線に立ち1から始める必要があると私たちは信じています。よそ者やI・Uターン者、農村地域の健康的な未来を築くことに関心のあるすべての人々は、地元住民と協力してコミュニティ内の複雑さにしっかりと向き合う必要があります。ビジネスに重点を置いた活性化なのかそうでないのかは様々ですが、よそ者として私たちが感じるのは、「まだ自分たちが理解していない地域の問題に独自の答えや解決策をもたらすことを容易に期待するべきではない」ということです。何よりも活性化活動に取り組む上で地元住民との直接的な関係や有意義な対話を維持するには、自分自身だけでなく全ての関係者のエネルギーが必要になるため、このプロセスが多大な時間を要するのは当たり前のはずなのです。

2. 西会津

西会津国際芸術村にやってきた当初、私たちは地元住民の存在の大切さをまだよく理解していませんでした。当時の私たちは、西会津は人口が少なく老朽化している田舎町で、芸術村という存

在があるおかげですでに活性化の取り組みが活発に進んでおり、町の人々はそれを望んでいるのだ、私たちは町活性化に向けて同じ志を持ったエネルギー溢れる人々の輪の中に居るんだ、と迷うことなく信じていました。

ある意味「特権的な立場」から町を見ていた私たちは、自分たちが外部の視点とデザインというスキルを地域に提供できるユニークな立場にいたとも感じていました。芸術村に滞在アーティストとして滞在していた1年間はグラフィックデザイナーの経歴を活かし芸術村とそれに関わる様々なプロジェクトを出来るだけサポートすることに集中しましたが、私たちが本当の意味で西会津について学び始めたのは、町で過ごす時間が増えて多くの地元の人と出会い対話をするようになってからでした。町の歴史、文化、そしてその人々のことを。

対話を重ねる中で、自分たちが初めに抱いていた仮定が間違っていたことが一つずつ証明されていきました。この町の地元住民の多くは芸術村の目的が何であるかを知らず、芸術村が取り組む数え切れないプロジェクトのいずれかによって直接的・前向きな変化を経験した人はほとんどいなかったのです。さらにその多くが芸術村と関与する人々についてあまり好意的な印象を持っていない事実にも驚かされました。自分たちがある種の輪の中だけで活動していたことに気づかされた私たちは、自身の信念と野心を再考することを余儀なくさせられたのです。

芸術村での1年間の滞在が終わり、私たちは西会津に正式に移住してこの町の住人になることを決意しました。この土地について正直まだほとんど何も知りませんでした。地元の人々から受けた寛大な温かさやサポートにより、ここに落ち着きたい、自分たちの「家」を作りたいと感じるようになったのです。この決断をする上でもう一つ重要だったのは、自分たちが属していた輪から独立するということでした。どこかに依存することなく、また「活性化」の取り組みに責任を負うことなく、自分たちなりのやり方で自律的にこの土地で生活することを決めたのです。

移住を決めたとき、ここでの生活には注意深い「バランス」が必要であると初めから意識していました。家族を持てるような快適な環境に住みたいという思いと同時に、表現者として様々なアイデアやプロジェクトにも取り組み続けたいという思いもあったので、それらを両立して実現させるには色々な意味でのバランスが大切だと信じていたのです。土地ににゆかりのないよそ者が「既存のコミュニティ」で新たに暮らしを始めるということは、地元住民の暮らしと私たちの生活が絡み合うということになります。自分たちの考え方ややりたい事を押し付けたり、対立的な雰囲気を作り出すことはしないようにしようと、自分たちの中で心がけていました。

3. 上野尻

2017年に上野尻という地区にある一軒の空き家を紹介してもらい、大家さんと直接賃貸契約する形でわたしたちの新しい拠点が決まりました。家は私たち二人が生活するには十分な大きさで、元呉服屋さんならではの広い土間スペースもありコミュニティスペースや印刷スペースを作りたいという私たちの希望を実現するには完璧な条件でした。

人口減少高齢化に伴い空き家が増え続けている現状にも関わらず上野尻はとても活発で、至る所で日常的に多くの住民が集い合い様々な活動に取り組んでいました。何も知らない私たちに対してもオープンな心で歓迎してくれたユニークな地元住民のみなさんがいたからこそ、私たちのあらゆる活動が可能になったと心から信じています。みなさんの存在がなかったら、私たちは全く違う場所で活動していたかもしれません。この地区に自然に広がる「助け合い(結)のコミュニティ」が、その後の自分たちの生活や思想に重要なインスピレーションを与えてくれたのです。

初めての土地でこれまで経験したことのないライフスタイルに飛び込んだ私たちは、できるだけ「聞く」ことに時間を費やしました。地区のお祭りや集会、会議、清掃(人足)などに参加しコミュニティが小規模でどのように機能しているのかを学んだり、近所の人とお茶や食事を囲み一緒に過ごす時間の中で新しい友情の在り方を発見したり、お互いの生活を共有することの意味を理解するようになりました。地区の暗黙のルールやしきたり、住民同士の古い関係性、デリケートな領域などを知らずに私たちが犯してしまった間違いもたくさんありましたが、その度に学び、前に進み、できるだけ同じことを繰り返さないように最善を尽くしました。

コミュニティスペースの運営を通して学んだ事も、私たちにとって貴重な教訓のひとつとなりました。家の一部をコミュニティスペース/印刷スペース/図書館として開放するという当初の計画は、実際にやってみてうまくいったこと、いかなかったことを発見していく中で大きく変化していきました。たとえば、近隣住民の年齢層は高齢者の数が圧倒的に多いですが、スペースに一番頻繁に訪れるお客さんが小学生たちだとわかった時、私たちはすぐに子供達がより快適に過ごせるよう空間を調整していきました。その後子供達が放課後に集まる場所になって行った状況を活用して、カジュアルな子供向けのアートクラスや英語教室を開催してみたこともありましたが、子供たちは単純に「自由な時間」を望んでいるのだということがわかった時には、その希望を実現するため再びスペースを調整していきました。私たち自身ここで何か事業を始めたり利益を追求したりすることにもともと興味がなかったことがスペースの絶え間ない「変化」を可能にしたのだと思います。繰り返すようですが、バーバリアンブックスはビジネスではなかったからこそ、上野尻のコミュニティ

ならではの特定のニーズに、より適切に対応することができたのだと実感しています。

もちろんその過程でたくさんの問題にも直面しましたし、このやり方でスペースを維持するのは簡単なことではありませんでした。私たちはどちらも安定した職に着いていたわけではないので、自営業のグラフィックデザインの仕事で稼いだお金から生活費を抜いたほとんどはコミュニティスペースやそれに関わる様々なプロジェクトに再投資されていきます。これを補うために私たちはそれぞれアルバイトを始めたのですが、これが何にも変えられない非常に良い経験となりました。一人は保育園、一人は地元農家さんのお手伝いと、これまで自分たちがいたフィールドの外で働くことで地域や町への理解はより深まっていき、同時によそ者としての距離感を改めて痛感したのです。芸術村という輪の中で経験した時間が町に対する第一印象や価値観にどれだけ影響を及ぼしていたのかにも気づかされました。

私たち自身地域活性化の動きに直接関わりはないものの、町の活性化の動きがトップダウンであることや、これらのプロジェクトに多額の投資がされていることは明らかでした。毎年都市部から町に「新しい活性化の取り組み」と共にあらゆる専門家がやって来ますが、日常生活の単純な問題は解決されていませんし、それらの取り組みに関する意思決定プロセスに地元住民の存在が取り込まれていない現状も、自分たちがいたフィールドを飛び出しネットワークを広げる事で、より明確に見えてくるようになったのです。

4. 田舎の資本主義

2019年、芸術村を通じて西会津にネクスト・コモンズ・ラボ(NCL)というコンサルティング会社が導入されました。NCLは、それ自体を「あらゆるセクターとの共創により、社会をアップデートするための実験と実装を行うソーシャルプロトタイピングチーム」と呼んでいます。ウェブサイトはこのような漠然としたフレーズで溢れていますが、NCLは町に新しいビジネスを設立することを決意したさまざまな起業家や投資家の組織にすぎないというのが個人的な印象です。

西会津のNCL支持者及び参加者の多くは、自分たちはこの地域に有益なことをしていると純粋に心から信じているのかもしれませんが。「衰退」しているこの町の未来を救うのは「独立したクリエイティブな起業家」であり、新しいビジネスの創業が最善の道であると信じているのかもしれませんが。都市部からやってきた起業家の多くは、自分たちが精通しているビジネスモデルや開発システムを地方の状況に再適用できると信じているのかもしれませんが。そして自分と意見が合わなかったり異

なる考えを持つ地元の人々は十分にそれを理解出来ていないのだと感じているかもしれません。

NCLのような農村地域における経済活性化のプロセスは「田舎の資本主義」と表現出来ると思います。資本主義は、世界中の人類の関係性を支配している経済的およびイデオロギー的システムです。この世の何よりも「即時の利益」と「無限の経済的成長」が重視され、いわゆる搾取する利己的な少数派(資本化)と、搾取される残りの多数派(労働者)で分けられる階層システム。もちろん資本主義の影響は、田舎と都市では全く異なりますが、それがもたらすマイナスの側面(家賃の値上げ、ジェントリフィケーション、不平等など)は、NCLのような組織の参入によって増幅される可能性があります。彼らにとって田舎という存在は「独自の力と可能性を備えた”生きている”コミュニティ」ではなく、「新しい利益創出のための資源」なのではないでしょうか。

もし田舎が「資本化されるのを待っている資源」であるならば、その田舎のコミュニティに住んでいる人々は何なのでしょう？彼らも単なる資源なのでしょう？彼らには自分たちで解決策を考える能力がないとみなされているのでしょうか？彼らは「救われる」必要があると決めたのは、誰なのでしょう？

NCLは「ポスト資本主義社会の具現化」というフレーズをよく使用していますが、これは実際、概念全体の誤解にすぎません。資本主義社会は現在進行中なので、次に何が起こるかを真剣に話し合うにはまず現在の資本主義のメカニズムを理解し解体する必要があるのではないのでしょうか。このシステムがどのように絡み合っているのか、なぜ社会は現在も白人至上主義と植民地主義の概念に依存しているのか。日本においては、戦後の経済発展への移行が現在の過疎化危機の核心にあることを理解する必要があります。現在の資本主義社会を抜け出すために今本当に必要なのは新しい資本システム作りよりも、まず目の前の現システムの問題追求と解体なのではないのでしょうか。私たちの意見としては、このような文脈における「ポスト資本主義」という言葉は無意味なものであり、それによりNCLが本当の意図を曖昧にしているように感じます。

NCLのウェブサイト上に書かれた西会津プロジェクトメンバー募集ページに書かれた文章は魅力的で説得力があります。ここで集ったコーディネーターと若い起業家たちは西会津で「インキュベーションやコミュニティづくりを担う」ことをミッションとし、地域を巻き込みながらともに「理想の社会」と「新しい創造的な未来」を実現を目指していくと書かれています。しかし実際の西会津におけるNLCのアプローチを内側から観察していると、地元住民の声が聞き取られていない現状や、その距離感が地域にトップダウンの関係性を静かに作り上げていると、私たちは感じ取りました。

NCLが目指す「理想の社会」と「新しい未来」...もちろん今の日本社会に必要な変化は数え切れないほどありますが、私たちはそれを理解した上で、それぞれの土地に昔から存在している社会とどう向き合っていくべきかを慎重に考えるべきです。日本の田舎には何百年もの間ここに住み働いてきた人々やコミュニティがあり、それらのほとんどが現在同じ問題を抱えていると思います。そのうちのいくつかはすでに消滅してしまっているかもしれません。待ち構える未来が明るいとは言えないかもしれません。しかし、もし私たちが本当にその土地にとってより良い未来を作ることに関心があるのなら、私たちをその未来へ導く中心にあるべきなのは、その土地の人々なのではないでしょうか？

5. 土地とのつながり

個人的には資本主義的な生き方を望まない私たちですが、よそ者として新しい土地に暮らす上でそのような個人の思想を前提に置く必要はないと思っています。たしかに都市部から田舎へ移住した動機の一部には、資本主義が私たちの生活に与える直接的な影響から逃れたいという願望はありましたが、それ以前にまずは私たち自身が心地よく暮らし成長することができる平和な場所を見つけたいという単純な憧れの方が大きかったと思います。地域の隣人と共存する日々の中でその「暮らし」がいかに実現可能であるか多くのことを学びましたが、何かの答えに行き着いたわけではありません。私たちは今もまだ、あらゆるモノコトに耳を傾けながら、この土地での「暮らし」のあり方を模索する過程の一部にいます。

そういう意味でも、私たちはこの土地のことをまだ何も知らない身であり、この土地の未来に関して何が正しいのか間違っているのかを地元の人々に伝える立場ではないと感じていました。前項で書いたような個人的な意見を特に主張することはしてきませんでしたし、このコミュニティが前進するために今何が必要なのかを最終的に決定できるのは、世代を超えた家族の歴史や土地とのつながりを持つ地元の人々だと信じてきました。どんなに私たちがこの土地に愛着を持っていても、私たちが持つ土地との関係性は、やはり地元の人々が持つ関係性とはこれまでもこれからも根本的に異なるのです。

もちろん、このコミュニティが抱える問題や未来への不安に私たちが全く関心がないわけではありません。日本全国の農村部で静かに忘れら去られていく数々の歴史と知識は何らかの形で保存され続けられる必要があると思っています。「過去を救う」ことに必要性・重要性を感じない人もいるかもしれませんが、私たちは常に歴史の担い手であると信じています。特に日本について

は、過去の歴史を学ぶことは必ずしも伝統に戻るということではなく、過去の教訓をどのように現在に適用していくかを学ぶ方法だと思うのです。広島、長崎、そして最近では福島からの生存者の声をしっかりと聞き取ることは、今日に直接関係する過去について考える上でこれまで以上に重要になってくると感じます。

私たちがこの土地に移り住んだ理由は地域活性化や創業のためではなく、単純にここでの暮らしにこの上ない幸福感を感じたからです。立派な肩書きはありませんが、一住民として、長い期間をかけて土地と人のことを学びながら、地区のために出来ることをしていきたいと思っていました。それがお茶のみだったり、一緒に農業をすることであったり、子供達のためのスペース作りだったり...形は様々ですが、自分たちに出来ることを日々の暮らしの中で実践するようにしていました。

これまで書いてきた内容はあくまで私たちのシチュエーションであり、日本各地のすべてのケースに言えることではありません。よそ者による地域活性化の取り組みが必ずしも本質的に悪いわけではありませんし、地元の人々が単純に多様な意見やリスクのある変化を受け入れたがらないことも実際少なくないと思います。社会の壊れた構造を修正し前向きな変化に向かって進むためには、外部の視点と新しい声が不可欠になる可能性は多いにあると私たちも信じています。しかし、その新古のバランスをうまく保つことは決して容易ではないという事実は、どこでも同じかもしれません。何が言いたいかというと、まず私たちはお互いを対等な立場でとらえることから始めなければいけないと思うのです。

6.この場所を去ること

2020年、私たちの近所に古民家を購入したNCLの起業家たちは、2年前に設立された移住者によるゲストハウスと連携し空き家の管理運用及びリノベーション、空き家利活用を促すセミナーやワークショップの開催など若者の移住者を魅了する新しい「まちづくり」計画をこの地区で実施することを明らかにしました。私たちは当初から違和感を感じていましたが、特に地元からの反発の声も聞こえてこなかったのも、やはりむやみに意見を発言することは控えました。もし私たちが最初から意見を明確に共有していたとしたら何かしら状況は変わっていたかもしれませんが、それは私たちにもわかりません。

実際のところ、状況は複雑です。この土地を去ることを決心した多くの住宅所有者は、出来れば自分の家を売って他の誰かが管理してくれることを熱望していますし、近所の高齢者の多くも、若者が

この土地に興味を持って移住しているという現状に喜びを示しています。同時に、それぞれの理由で地区の新しい方向性と急速な変化に不満や不快感を抱いている住民の懸念の声もちろんありますが、どちらにしても、このように地元住民がそれぞれ違った感じ方や意見を持つ中で、NCLがもたらす変化が最終的にコミュニティを傷つけるのではないかと私たちが感じる理由を近所の隣人に伝えることはとてもデリケートで困難なのです。何度も繰り返すようですが、この地区にとって何が非か否かを決めるのは私たちの役目ではないと感じるのです。

周りに正直な意見を伝えることは難しくても、自分自身の気持ちには正直に向き合うべきだと思いました。その時、この場所で自分たちの未来を想像するのが難しくなってしまったことに気が付いたのです。現在コミュニティにいる私たちの友人のほとんどは60～80代で、農業を始めあらゆる地域活動が難しくなる年齢に近づいています。今後数年間でコミュニティの人口統計が必然的に変化していく中で、自分たちの暮らしが徐々に「新しいまち」の一部になっていくのを想像すると心が強く揺さぶられました。実際に起業家たちが新しいまちづくりに成功するかどうかは関係なく、今後の彼らの行動はやがて私たちを避けられない対立に導くことが想像できました。それは私たちも望んでいない事です。スペースを閉じてこの町とお世話になった友人たちと離れることは本当に辛く悲しいですが、今行動を起こさずに現状を長引かせることは状況を悪化させるだけであると確信しました。ここに留まり様子を見るよりも、新しい環境で生活そしてバーバリアンブックスのプロジェクト続ける方が良いと判断せざるを得ませんでした。

これからバーバリアンブックスがどのような形で変化していくのか、現時点では私たちにもわかりません。時間をかけて考えや感情を収集してから、次のステップを慎重に計画したいと思っています。過去数年間、私たちを支えてくれたみなさん、特に近所の隣人のみなさんや友人たちから受け取った果てしない励ましとおもてなしに心から感謝しています。私たちは西会津で多くのことを学びました。そしてもちろん、これからもまだまだ学び成長し続ける必要があります。たくさんの教訓を活かして今後の道を照らしていきたいです。そしていつかまた、バーバリアンブックスの第2章をみなさんと共有できたら嬉しいです。

いつも私たちの言葉を読んでいただき、ありがとうございます。

またいつかお会いしましょう！

M&W

2020年 秋

I. Revitalization

Four years ago in 2016 we were looking for a way to practice graphic design in a more meaningful way. Our searching on the internet introduced us to the concept of *chiikiokoshikyōryoku-tai* (town revitalization jobs), a three-year position marketed to young people in Japan who are interested in living and working in *inaka* (Japanese countryside). A position like this was advertised online by an organization called the Nishiaizu International Art Village, and this became our entrance to the town.

It is no secret that rural areas in Japan are undergoing a severe depopulation crisis as more and more young people choose to leave their hometowns and settle in or around cities. The aging population combined with labor scarcity has created a situation where local economies can no longer sustain themselves and entire towns are at risk of disappearing. Because of this, state government, local municipalities, and private companies have all placed an increasing emphasis on various revitalization programs (like the *chiikiokoshikyōryoku-tai*) as a means of combating this problem.

At the time, we thought the concept of these revitalization programs was inherently good. After all, if the goal is to build a better future for rural communities, young outsiders can undoubtedly play an important role in this process. To revitalize is to give new life to a dying place... But what exactly is a dying place? What does revitalization actually entail? Who benefits from revitalization? Who is harmed? Whose future is affected by it?

The answers to these questions are not so obvious. Every area, town, and small village has its own culture and unique history. They each have their own desires, fears, and stories. While depopulation may be a major problem in the countryside, it's far from the only one, and in some places, it may not even be viewed as a problem at all. So when we think about revitalization we must understand it is inseparable from the distinct context of each existing community and their lives.

Revitalization is not a one-size-fits-all band-aid that can be applied to everyone and everything, but the solution in Japan often appears to be unanimous; economic development. Improving the local economy is the end goal of most of these revitalization projects with the assumption that if more money is circulating within the town, people's lives and their futures will improve. Without a doubt, improving the local economy can certainly produce short-term positive effects and provide jobs for the time

being. But when profit is defined as the ultimate objective, revitalization simply becomes a means of getting there.

When thinking about the long-term goals of a community, or less quantifiable factors like the happiness of local people, financial gain may end up having little to do with their lives. While some towns may focus on profit-based activities like tourism, others may be more interested in maintaining its farmland or improving local education systems, issues that are not necessarily resolved with more money. In these contexts, what role can revitalization projects take?

We believe a more sincere and useful form of revitalization needs to start from the bottom at the same level of the local people. Outsiders, “U-turners,” and all those who are interested in building a healthier future for rural areas need to work together with locals to address the complexities within their own communities. The solutions may or may not involve an emphasis on for-profit business, but as outsiders we cannot expect to bring our own answers to problems we have yet to understand. Importantly, the process can and should take time, because maintaining direct relationships and a meaningful dialogue involve a lot of work and energy from everyone involved.

II. Nishiaizu

When we first arrived to the Nishiaizu International Art Village, we did not understand the importance of the local people. We made the mistake, as we have seen many do after us, of assuming the town was a homogeneous group of like-minded people. We assumed Nishiaizu was simply another depopulated and aging *inaka* town with not much of a future. We assumed that the existence of NIAV and the fact that revitalization efforts were already underway proved this was what the local people wanted.

From our privileged position, we also thought we were in a unique place to offer our outside perspectives and skills to the area. We eagerly began to do as much as possible to assist NIAV using our background as graphic designers under a one-year artist residency. But as our time living in Nishiaizu grew, we started to meet and talk to many locals. We began to learn about the town, its history, culture, and its people.

Our initial assumptions were proved false one by one. We slowly realized that we had been living and working in a bubble. Many people in our town had little idea what the purpose of NIAV was and rarely experienced direct positive change on their lives due to any of the organization's projects. Many of them also held less than favorable views about the organization and the people involved in it. This awareness forced us to rethink our own beliefs and ambitions.

But with our year long residency coming to an end, we made the decision to stay in Nishiaizu and become residents of this town. We still knew so little about the place, but the warmth and support we experienced from locals made us excited to settle and finally try to make a "home." Importantly, we also decided that our existence would be independent from the bubble. We would establish our lives here autonomously without relying on NIAV and without being responsible for any "revitalization" efforts.

We were aware that living here would involve a careful balance. Personally, we wanted a place where we could feel comfortable enough to settle and eventually raise a family. But there were also things we wanted to do, ideas and projects we wanted to explore. We were mindful of our place as strangers, and we did not want to impose our beliefs or create a confrontational atmosphere. We were settling in an already existing community, and we knew our lives would be intertwined.

III. Kaminojiri

In 2017 we found and moved into a vacant home in the small village of Kaminojiri, renting it from the owner who moved away years ago. We were the first young outsiders with no connection to the land to enter the community in a very long time. The house was more than big enough for the two of us, and because it used to be a clothing store, there was adequate space to pursue our own interests in establishing a printing workshop, library, and community space as the Institute of Barbarian Books.

Despite its own aging population and accumulation of vacant homes, Kaminojiri is particularly active with many residents working and meeting together on a regular basis. We believe our following activities were only possible due to a unique group of people in the neighborhood who were exceptionally open and welcoming, despite knowing nothing about us. If it weren't for them, it's very possible our path would have led us somewhere quite different.

As outsiders to the neighborhood, we had a lot of listening to do. We became part of a lifestyle that neither of us had experienced before. Taking part in the local festivals, gatherings, meetings, and clean-ups taught us a lot about how communities function on a small scale. Spending time with our neighbors and sharing tea and meals together also gave us a new perspective on friendship and what it means to share our lives with each other. We also made countless of mistakes along the way, not understanding the unspoken boundaries or various pre-existing relationships and sensitive areas. We did our best to learn, move on, and hopefully not repeat them.

The community space became one of our invaluable lessons. Our initial plan to open our home and combine a library, printing workshop, and free space changed considerably as we discovered what worked and did not in our context. For example, when it was clear that the neighborhood elementary children were the most frequent visitors, we adapted the space to be more comfortable for them, perhaps at the expense of older residents. We then thought we could use the opportunity to hold informal art classes or English lessons but the children told us that what they actually wanted was simply free time. So again, we adapted the space to make this workable. We believe this constant flux was possible because we were never interested in starting a business or pursuing a profit model. Since we never centered making money as the end goal, we could respond more adequately to certain needs in the community.

At the same time, it was not easy. With neither of us holding steady jobs, whatever little money we did make through our freelance graphic design work was mostly reinvested in the space and various related projects. To supplement this, we began to work part-time jobs in the town; one of us at the kindergarten and one of us for various farmers. Our understanding of the local area and town grew, and we once again became painfully aware of how distant we are as outsiders and how much our experience as part of the NIAV bubble had shaped our initial beliefs.

We realized that “revitalization” was being applied from above, and it was clear that a lot of money was being invested in these projects. Every year brought new “revitalizers” and “experts” from Tokyo to our town, but simple issues in the lives of everyday people were not being addressed. Local people felt no benefits and were not invited to partake in any part of the process.

IV. Countryside Capitalism

In 2019 a consulting company called Next Commons Lab was introduced to Nishiaizu through NIAV. NCL refers to itself as “a multi-sector activity platform and new community aimed at creating businesses for local resources.” From our observations, NCL is simply an organization of various entrepreneurs and investors determined to establish new businesses in the town.

We suspect many advocates of NCL in Nishiaizu may sincerely believe they are doing something beneficial for the area. They may believe that because the health of the town was “declining” it is up to them as “independent, creative entrepreneurs” to save its future. They may believe that creating their own businesses is the best possible path toward this, and that the locals who disagree or have different ideas simply don’t understand enough. Many of the “entrepreneurs” that have arrived from the city or spent time working there also believe they can simply re-apply the same business models and systems of development they are familiar with to a rural context.

We prefer to be honest and call this process of economic revitalization in rural areas *countryside capitalism*. Capitalism is the economic and ideological system that currently governs the relationships between human beings throughout this entire society. It is a hierarchical system that embodies racism and patriarchy, and values immediate profit and infinite growth over all else, rewarding a selfish minority while punishing and exploiting the rest (and our planet). The effects of capitalism in the countryside are certainly different than in the city, but negative aspects (like rent increases, gentrification, and inequality to name a few) are amplified by organizations like NCL that view the countryside as a resource to mine for profit, and not as a living, active community with its own agency and ability.

If the countryside is a resource waiting to be capitalized, then who are the people living in those communities? Are they just a resource as well? Are they considered unworthy and too foolish to think of their own solutions? Who decided they need to be “saved”?

NCL proponents sometimes use the phrase “post-capitalism,” which is really just a misunderstanding of the concept entirely. A capitalist world is far from over, and if we are going to seriously talk about what comes

next we first need to understand and dismantle the mechanisms of capitalism that are currently in place. We need to understand how and why this system is intertwined and dependent on the ongoing concepts of white supremacy and colonialism. In Japan, we need to understand how the post-war shift to economic development is at the core of the current rural depopulation crisis. In this context, “Post-capitalism” is a meaningless word, and a dishonest attempt by NCL to obscure their intentions.

In Nishiaizu, the top-down approach of NCL also portrays what little regard they have for local people and their voices. The town is often portrayed as a “blank slate,” where young people are free to play and pursue whatever desires they have. NCL wants to establish their own “new societies” and “new creative futures”— all produced by and for its own entrepreneurs.

But what of the society that already exists? There are people and communities in inaka that has been living and working here for hundreds of years. There are many of them throughout the country. They are not perfect, and the near future for many of these places seems dark, and some of them have already disappeared. But if we’re really concerned with making a better and “new” future, we believe the people from and living in these communities should be at the heart that guides us there.

V. Connection to Land

Even though we personally lean towards an anti-capitalist stance, we did not think it was necessary to foreground these beliefs in our context as outsiders. While moving to inaka was partly motivated by a desire to “escape” the more direct effects of capitalism on our lives, we were also driven by a simple yearning to find a peaceful place to exist and grow. Living with our neighbors in the community had taught us so much about how this is possible, but we were and still are in the process of listening.

Regardless of our personal moral principles and opinions, we also didn’t believe it was our place to tell the local people who is right and who is wrong. We still think that the local people, many of whom have family history and connections to the land stretching back generations, are the only ones that can ultimately decide what is right for their communities moving forward. We are outsiders to this place, and our relationship to the land will forever be fundamentally different.

Of course, it would be a lie to say we don't care about the future of this community and *inaka* in general. We believe that the amazing history and knowledge that is in danger of being erased and forgotten in rural areas throughout Japan needs to be preserved and fought for in some way. Some may dismiss this as conservatism, or think of it as a foolish wish to save the past, but we believe we are always the carriers of history. Learning about Japan's history in particular is less about returning to tradition and more about how we can learn to apply lessons to the present. In a culture that seems to care less and less about the voices of survivors from Hiroshima, Nagasaki, and more recently, Fukushima, learning from and thinking about the past as it directly relates to today is more important than ever.

Outsiders and people interested in revitalizing the countryside are not always inherently bad either. Just as groups like NCL can be narrow-minded in their approach to solving problems, local people can also be stubborn and unwilling to hear different opinions and risk transformation. Outside perspectives and new voices can be essential parts to fix broken structures and move towards positive change. But working towards this balance is not easy. We must begin by treating each other as equals.

VI. Leaving

In 2020, NCL entrepreneurs bought a house in our neighborhood. In cooperation with a new guesthouse established two years ago, they revealed their plan to begin building a "new town" in Kaminojiri by purchasing vacant houses and renovating them to be more appealing and marketable to young people. We had felt uncomfortable about this from the start, but refrained from saying anything publicly as there appeared to be no push-back from the locals. It's possible things would be different if we had made our opposition more clear from the start; unfortunately, we will never know.

The situation is complex—many homeowners who have decided to leave the neighborhood for good are eager to sell their homes and pass the burden of caring for it to someone else. Many older residents in our neighborhood are also happy at the simple fact that young people are interested in the area and starting to live here. There are also voices of concern, residents who, for their own reasons, are also unhappy and uncomfortable with the new direction and rapid changes. In either case,

it is hard for us to articulate to our neighbors exactly why we believe so strongly this project will ultimately hurt the community. Again, we don't believe it is our job to decide that fact for them.

But when being honest with ourselves, we realized we can no longer envision a future for us in this community. Whether or not NCL and the guesthouse are successful in their bid to make a "new town," their actions from now will eventually bring us into unavoidable conflict. Our current friends in the community, most who are in their 60's and 70's, are approaching the age when they can no longer farm. When the demographic of the community inevitably changes in the next few years, it is very difficult for us to imagine being part of the "new" neighborhood. Rather than wait it out we have decided it would be better for us to continue our lives and projects in a more amicable environment. Admittedly, closing the space and leaving this town and the many friends we have made is heart-breaking, but we also know prolonging the situation will only make things worse.

The future of the Institute of Barbarian Books is unclear at the moment, so we will take time to collect our thoughts and emotions and carefully plan our next steps. We are incredible grateful to the people who have supported us throughout the last few years, and especially to our neighbors and friends for their endless encouragement and hospitality. We have learned so much from our time here and we hope to use these lessons to light our path forward. And when the time is right, we're excited to share the next chapter of the Institute of Barbarian Books.

Thank you for reading, as always.

M&W

Autumn, 2020





M A N Y T H A N K S

We wish we could write a list of everyone that helped, encouraged, and inspired us from the last four years, but it would be too long. Thank you to all that visited, purchased something from us, shared our zines, and volunteered (or wanted to volunteer). Thank you to all that write letters to us (you know who you are) and please don't send to our old address anymore! Thank you to the amazing people of Nishiaizu and Kaminojiri in particular, for influencing and teaching us more than they could ever know. Thank you to the special friends who gave us their time to listen to our thoughts about leaving and reading through early drafts of this zine. And thank you to Sugari mountain, Iide mountain, and the beautiful air, water, snow, soil and animals that sustained our lives here.

あ り が と う

過去4年間、私たちを助け、励まし、刺激してくれたすべての人の名前をここに書けたらいいのと思いましたが、ここには収まりきれないことに気がつきました。バーバリアンに訪問してくれた方、商品を購入して下さった方、私たちのzineを共有してくれた方、ボランティアをしにきてくれた(またはボランティアをしたかった)すべての方々に感謝申し上げます。そして西会津、上野尻で出会った素晴らしい人々へ、私たちにこれまでにないほどのインスピレーションを与え、たくさんのことを教えてくれて本当にありがとうございました。時間をかけて私たちの話を聞き一緒に考えてくれた友人たち、本当にありがとう。最後に、この場所で私たちの生活を支えてくれた美しい空気、水、雪、土、須刈岳、飯豊山、動物たち、本当にありがとう。

website: www.barbarianbooks.institute
instagram: [@instituteofbarbarianbooks](https://www.instagram.com/instituteofbarbarianbooks)
online store: www.barbarianshop.net

telephone: 080.4684.0130
email: info@barbarianbooks.institute

